

[特別企画2]

高知センターにおける供給部門と学術部門の連携

梁川真理子, 北川晋士, 濱田秀誠, 西森健二, 門田 広, 山中満明, 河野 威
高知県赤十字血液センター

【はじめに】

当センターでは、全国より1年先行して平成26年度より供給部門に医療機関担当者を配置し、医療機関対応の強化を、翌27年度からは、所長・部長・各課長および医薬情報担当者(MR)・医療機関担当で構成される「医療機関情報連絡会議」を設置し、情報の共有化を図ってきた。医療機関情報は今後の血液事業の方向性を位置づける重要な要素の一つであり、情報を基に連携し対応することが必要と考えられる。今回、当センターにおける供給部門と学術部門の連携強化への取り組みについて報告する。

【連携前の体制】

血液センターは、輸血用血液製剤の供給業務と

安全管理業務といった両面から医療機関と深く関わっている。関連する血液センターの部門としては、供給業務を主とする「供給部門」、安全管理業務を主とする「学術部門」がある。一方、医療機関では、窓口となる検査部門や薬剤部門などが行う「血液管理部門」、「診療部門」、「看護部門」、「輸血療法委員会」等がある。各部門別の関係を見た場合、「供給部門」は血液の窓口となる「血液管理部門」にのみ、一方「学術部門」は医療機関の幅広い部門に関わっている現状がある。供給部門は主に血液の供給や需給管理に特化した業務内容であり、学術部門は安全管理業務にかかる副作用対応をはじめ情報提供や収集、説明会や院内輸血療法委員会参加等を業としており、センター内では各部門が縦割りの業務体系となっている(図1)。

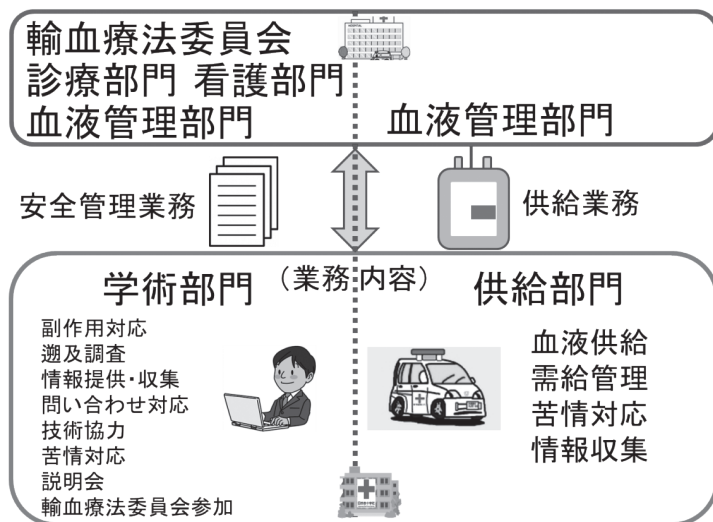


図1 医療機関と血液センターの関係(部門別)

【取り組み】

今回、当センターでは供給・学術部門の連携を強化する目的で以下の取り組みを行った（図2）。1）供給課員がMRの行っている説明会に同行訪問し、血液製剤の取り扱いや血液管理等を理解することで、職員の知識向上を図り、円滑な供給業務に活かすとともに医療機関とより良い関係の構築を図った。2）血液供給にかかる臨時便低減化を目的として、定期便以外の搬送が多い医療機関に対し、説明会や委員会への同行訪問時に担当者へ説明と協力依頼を実施した。3）供給量の少ない医療機関への対応として、MRへ連絡後、MRが直接搬送し対応することで、安全性情報の提供や適正使用状況の確認を行うなどの連携を図った。4）医療機関情報連絡会議等の所内会議を通じ、MRの活動状況や医療機関情報、その他関連情報を共有するとともに、学術部門からの立案に対し、会議で協議し、各部門が連携しカイゼンする体制とした。

【事例】

1）供給課員に対し8施設（平成28年度）の病院説明会へ同行訪問を実施した。2）医療機関担当者がMRと同行し、5施設（平成28年度）に臨時便低減化への協力依頼を実施した。3）A病院（RBC6単位／平成27年度実績）よりRBC2単位の受注後、MRへ連絡、MRが直接搬送し対応することで安全性情報の提供を行った。B病院（RBC15単位、FFP4単位／平成27年度実績）よりFFP120受注後、MRが状況確認、直接搬送により適正使用状況の確認を行った。4）備蓄病院内輸血療法委員会の情報から在庫定数を適宜見直し、期限切れの削減による有効利用を図った。また、遠方に位置する3施設（平成28年度）に対して、供給にかかる時間・効率・コスト面から搬送便の変更を行った。

【連携による効果】

当センターでは、いくつかの学術業務について供給部門でサポートを行っており、連携強化により部門間の情報共有が促進され、医療機関対応の幅も広がった。各部門における最大の特徴は、学術部門は幅広い専門知識や医療機関情報を、供給部門は幅広い供給体制とマンパワーを有している点だと考えられる。一方でこの特徴は、お互いが必要としている要素ともなっている。この要素を相互に補完することにより、学術部門は、幅広い医療機関をカバーでき、業務の効率化につながった。供給部門は、職員の知識レベルの向上や供給に係る問題解決の近道につながったと考えられた（図3）。また、連携による効果は、医療機関と良好な関係の構築や顧客満足度の向上といった血液センターとしてのカイゼンにつながるものと考えられた。

【今後について】

平成28年度から新たに供給部門において受注配送時に入手した供給動向・問い合わせ・苦情等を記録し、供給モニタリング・対応・カイゼンに活用するツールとした情報収集シートを作成し運用を開始した。また、合同および院内輸血療法委員会で病院献血推進の働きかけを実施し、供給・

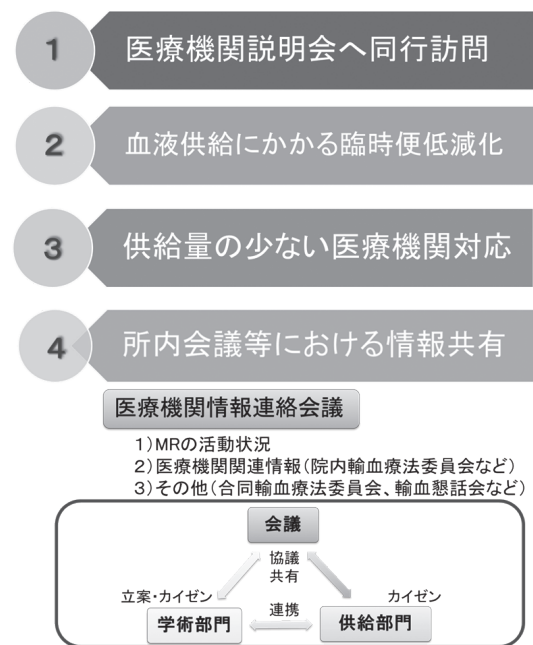


図2 当センターにおける供給部門と学術部門の連携強化への取り組み

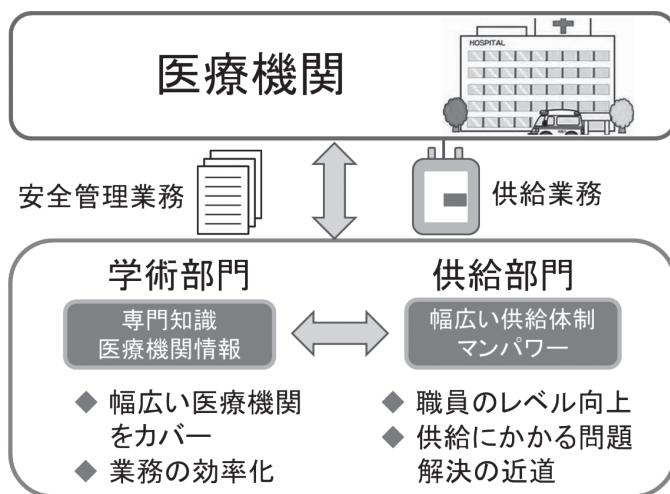


図3 連携によるカイゼン効果(血液センター部門間)

学術部門間にとどまらず、所内全体での連携強化に取り組んでいる。

【結 語】

供給・学術部門は共に医療機関に対する窓口と

して位置付けられ、血液センターの“顔”としての対応が求められている。対応を充実するための所内連携は、必要不可欠であり、最終目標としての顧客満足・カイゼンにつながるものと考えられる。